



Title	Handbook of Descriptive Linguistic Fieldwork By Shobhana L. Chelliah and Willem J. de Reuse, Springer. 2010.
Author(s)	白, 尚燁
Description	書評
Citation	北方人文研究, 7, 123-125
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55042
Type	other
File Information	jcnh07-08-Baek.pdf



〈書 評〉

Handbook of Descriptive Linguistic Fieldwork

By Shobhana L. Chelliah and Willem J. de Reuse, Springer. 2010.

白 尚燁

北海道大学大学院博士課程

本書は、Shobhana L. ChelliahとWillem J. De Reuseの共著による記述言語調査（descriptive linguistic fieldwork）の基本書である。著者の一人であるChelliah氏は、危機言語の調査・データ構築・分析を専門にしている記述言語学者で、現在チベット・ビルマ語族のラムカン語の記述に関わっている。またReuse氏も危機に瀕している言語の記述に携わり、近年アメリカ先住民言語の一つであるアパッチ語に関して研究を行っている。

記述言語調査の基本書としては、Samarin（1967）、Payne（1997）、Newman & Ratliff（2001）、Bowern（2008）があり、言語調査者によって大いに活用されている。しかし、これらはいずれも言語分析の方法論または言語調査のエッセイなど記述言語調査のある一つの側面に偏っている傾向がある。ところが、本書は記述言語調査の基本概念や方法論から言語調査による成果の活用と管理まで記述言語調査に関するあらゆる情報を一冊の本に集約したものである。

本書は、以下の構成からみて、大きく三部【①記述言語調査の基本概念（1章-3章）、②記述言語調査を行うための準備（4章-8章）、③言語記述の方法論（9章-13章）】に分類できる。

・目次

第1章：導入（introduction）

第2章：記述言語調査の定義と目的（definition and goals of descriptive linguistic fieldwork）

第3章：言語調査の歴史（the history of linguistic fieldwork）

第4章：言語の選定（choosing a language）

第5章：フィールドワークの準備（field preparation: philological, practical and psychological）

第6章：フィールドワーク倫理（fieldwork ethics: the rights and responsibilities of the fieldworker）

第7章：話者と言語調査者（native speakers and fieldworkers）

第8章：計画・ノートテキング・データ管理（planning sessions, note taking and data management）

第9章：語彙調査（lexicography in fieldwork）

第10章：音声・音韻調査（phonetic and phonological fieldwork）

第11章：言語類型と用語（what to expect in morphosyntactic typology and terminology）

第12章：文法記述のテクニック（grammar gathering techniques）

第13章：意味論・語用論・テキスト収集（semantics, pragmatics and text collection）

本書の第一部では、記述言語調査が「話者との相互作用（interaction）」で得られ

た言語データに基づき、ある言語の構造（structure）について調査すること」と定義した上で、記述言語調査の目的として次の三つ①主要な目的（primary goals）、②二次的な目的（secondary goals）、③付加的な目的（ancillary goals）を設定して論じている。これは、言語調査が単なる言語の記録にとどまるだけではなく、言語学や文化人類学の発展、さらにその言語を話している言語コミュニティによる文化の保存にも、大きく関わっていることを示唆している。さらに本書は、記述言語調査の歴史について詳しく触れていることがその特徴である。最初の記述言語調査と考えられる宣教師による言語記述から言語研究者による言語調査まで、今までの記述言語調査が、誰によって、どのような言語を、どんな目的で、どのように成されたきたかについて述べている。このような記述言語調査の歴史に関する記述は、他の関連文献から、ほとんど見られない。もしあったとしても1～2ページにすぎない程度である。これは、以前に行われた言語調査の記録をたどることで、人類が未知の言語に対してどのようなアプローチを行ってきたか、人間の言語に対する認識や理解がどのように変化してきたかを知るためにも、とても興味深いテーマである。

次に第二部（4章-8章）では、記述言語調査を行うために考慮すべきことを次の五つの項目①言語の選定、②フィールドワークの準備、③倫理意識、④話者の選定、⑤言語調査の計画づくりに分けて述べている。これらのうち、記述言語調査においてもっとも重要なのが調査言語と話者の選定である。本書は、調査言語と話者の選択に関わってくる要因を細かく分類し、言語調査者が自分の調査目的に合わせて言語と話者を選定する際に活用できるようにしている。さらに、言語調査を実施するためには、財源についても検討しなければならない。本書は、言語調査のための研究助成公募に応募する要領から言語調査に必要とされる機材リストまで丁寧に紹介している。このような言語調査の準備作業は、すでに調査経験のある人にとっては、何の無理もなく進められるプロセスであるかもしれないが、言語調査に携わった経験の少ない調査者には頭を抱えるところであろう。そのため、本書の第二部はそのような実践経験の少ない調査者にとって参考できることが多い。無論、言語調査の経験が豊富な研究者においても、より効率的な調査を行うために活用できる箇所はあるはずである。

最後に第三部は、語彙調査、音声・音韻調査、文法記述のテクニック、テキスト収集について述べている。これは、主に言語の記述や分析に関わるもので、既存の文献と共通しているところが多い。本書は、文法記述の調査項目をその難易度によって格付け、調査者が自分が行おうとしている調査にどのような難関や注意点があるか認識できるようにしている。これは、現地調査で予想した調査の流れと異なる展開を経験したことのある調査者にとって、共感できることが多いだろう。またこれによって、時間をむだに使うことを最小限に防ぐこともでき、言語調査をより効率的に行うことができる。さらに、本書は主に言語の形式に重点を置く記述言語調査において、看過しやすい意味論と語用論の重要性についても指摘していることも、他の関連文献と大きく異なる特徴である。

本書は、すべての章において、膨大な先行記述に基づいて説明している。これ

は当たり前のことであると考えられるかもしれないが、言語調査というのは実用的な面が多いため、個人差が出やすいところも少なくない。しかし、本書はそのような主観が働くところまで、必ず以前に書かれた文献に触れ、それに基づいて論じている。そのため、読者は本書の客観性に信頼を持つことができるだけでなく、各章の末尾についてある参考文献を用いて記述言語調査に対する理解をさらに深めることができる。

本書の足りないところをあえて言うなら、あまりにも広い範囲を扱っているため、要点を中心に圧縮して説明しているところが多少見られることである。これは、記述言語調査に関するあらゆることに触れるためには、やむを得ない選択だったと考えられる。それでも、本書が記述言語調査に関わる研究者又は学生にとって、非常に有用な基本書になることは変わらないだろう。

参考文献

Bowern, Claire

2008 *Linguistic Fieldwork: A Practical Guide*. Palgrave Macmillan.

Newman, Paul & M, Ratliff (eds.)

2001 *Linguistic Fieldwork*. Cambridge University Press.

Payne, Thomas E.

1997 *Describing Morphosyntax: A Guide for Field Linguists*. Cambridge University Press.

Samarin, William J.

1967 *Field linguistics : a guide to linguistic field work*. Holt, Rinehart and Winston.